

第342回 芹沢文学愛好会月例会

テキスト「真珠」

司会 田村英理

司会：皆様から感想を聞きたいと思います。どなたかトップバッターはいませんか？
節子さんが3人いるので、どなたか？

A：出だしが優しい書き方。先生は、男性なのに表現が優しい。上品で育ち良さがある。出てくる会話が印象に残った。コウキの鉢に目がいくのは、若くて渋い人だなあと思いました。真珠nネックレスを戦争のどさくさに無くされた。ちょっとした会話から誰でもこういう事はあり得る。P18 後ろ6行 多分この事から人を疑うことになった。人間誰しもあることだから、人を疑うのはこういう事を許される。戦争の悲惨さはよく表現されている。こういう事を二度と侵してはいけないと思う。

コウキ康熙

真珠 当時のお金でいくらだったか

テーマが大きな話題になっている。清の時代の陶器

B：両者とも聞いたことがない。

C：もう一カ所字が読めない。かくしゃく。丁寧な言葉。大分時代が立つとこういう言葉がないのでは。骨董に興味がある。戦争中は経験があるので、よくわかる。良い家のお嬢さんだったらこういう事があるのでは。戦後そういう人が一杯いた。そのころの世相をなつかしく思い出しながら読ませていただいた。疑った部分はどういうことになったのかクエスチョンです。

D：真珠の首飾りが物欲の象徴として書かれているのではないか。祖母の態度、妖気が真珠の正体を、ロードオブリングを思い出させた。真珠に見せられて話していた。終戦になると忘れられなくなる。花屋のおばさんの感情がおかしい。それでも父親に薄気味悪さを感じた。殺伐とした生活にうるおいを与えている。人間にあたためたいなど主人公n美しさを表している。悪いことをおもってしまう。不安定な世相と重なるのではないか。絨毯を盗まれて疑っていたのではないか。心の不均衡さを表している。

司会：祖母が鏡を通して妖気を感じたというところは、確かに気になった。祖母の姿に妖気を感じた。祖母が持っていたのに孫娘が妖気を感じた事で何かありませんか。

E：よくわからないけれど、感想だけで。宝石など若いときからあるときまでは、執着していた。何度も何度も見て買った。なかなか手に入らないものを宝石とかそういうものにまつわるものを買った。はっきりわからない。

F：私の感想は、思い詰めた感想ではない。代々引き継いでいくものがある。次の憂いを含んで長く生きられないだろう。次の時代に生きる意識。孫娘に渡せたある意味では役割を果たせた。如何に上流社会へのステイタスではないか。祖母が2連の数

珠を首飾りにして「これは天然よ」と渡してくれた。貴重なものを次に渡せた安堵感がある。

G : 式に近いものがあつたのでは。譲るのは孫娘であつたのではないか。多分本当は、結婚する時に渡せないという事に気がつたのではないか。それが妖気というものを感じた。

H : +して、真珠そのものに秘めた歴史があつて、そういう高価なものの因縁をしょつている。思いしめたようなものに何かが真珠の中に

司会 : 執念ではないか

I : Aさん(B)は物欲と自然というが人間が作り出した心をどう感じるか、心の豊かさを感じる。人間はどうすればなれるのだろうか。人間同士であつて分からない言葉であつても、心の感性が豊かであればどういう意識になる。「茫漠さをはなつた」など美しさの感性を豊かに放つなど、作者の節子さんが光りを放つ豊かな感性をはなつことなど神様ご褒美といつて出てきた、ものを発するものを感じられるか、感性を磨かれてくるだろう。神様からご褒美だよといただくことができるというのが作品のテーマだと思つた。川端康成の言葉、「ものをみる事は根が大切だよ」ということを感じられる。

司会 : 戦後の殺伐とした中で小説が書かれた。他にこういう観点があるよというのがありますか。

J : わからない語彙があつた。P17冗談。よくそのしゅうれんじょうというのはなんでしょう。これを読んでテーマとして、作品の中にあるのではなく、読者のなかにあるのではないか。節子が花屋のおばさんを疑う。どう感じるか、問いかけているのではないか。芸術とかものを見て美しく感じるとか、人間というのは疑いたくなつた時、どう猜疑心を殺していくか、おばあさんからのプレゼントという言葉でうまくいつている。微妙な心の奥行きを感じて読者の個人にかへつた時はどうだろうか。そうじゃないとそう疑うことが良くないなど節子さんのところが非常にいい。池田さんに近い。

司会 : 防空頭巾

k : おばあさんからもらつてウツパラうとするのは、どういうことか。節子さんの真理が怖いような気がする。

l : 現実的な見方が真の見方ではない。

M : この真珠としても鉢としても骨董的な価値など大事にしてない。金魚鉢から火鉢にする、価値を知っている人はそういうことをしない。父親と正反対をする。真珠もそうだけど、花屋のおばさんにかげがえのない記念品を忘れません。必需品でもない、訴えかけてくるのではないか。花屋のおばさんを断定にしているのか。金目のものでないと本心から言つたのか、

N : 読者から訴えかけたい。美しさを楽しんでいけばいいのです。高村さんにいうように金額を捉えて、本心ではない。神様からご褒美をもらつていたのではないか。P27上段。すずめがトタン板の上を歩いていくなどホツとする表現がある。

O : 山田さんの質問ですけど、父は恍惚としている(物事に心奪われてる様)節子さんはそういう事を。お父さんを戒めている。

- P : 私は、花屋のおばさんを疑った言うことについては、どこまでかなあとと思う。ホッとしました。いろいろな人の噂、いろいろな面で人を疑っているのはある。遠回し遠回しで分かってくれるのではないかな。当時から先生の女性観が合ったと思う。結婚と言うことに鳴ると逃げ出して結婚はだらしなくなるという事。最近の読み方をしていると先生の読み方に苦労した。70というのは高年齢。あの当時とは違う。
- Q : ミステリーではないか。結局は、戦争の悲惨な女性、男性の心理の微妙な動きがあったのではないかな。普通の人を読んだら出てきて良かったなあとと思う。定年だとか、基調さを出している。この女性が誰か拾っていてうめたのではないかな。
- R : ハッピーエンドで良かったのではないかな。妖気を3回姑さんから感じた。私の姑の場合はツゲのくしとスカーフ、ツゲのくしの目が光った。ある程度の年齢になれば出すのではないかな、P19なつかしい事は、終戦直後のスフ、さっきのおばさんのことだけど、最後はしてやったりとこの言葉を信じて、このおばさんがやったと信じた、随分育ちの違いがある。終わりの方にある今の時代に座談会をしたらすごく面白いと思った。
- S : 妖気。執念。
- T : Oさんの話を聞いて、花屋のおばさんが取っている。あわてて、真珠が飛び出すのではない。花屋のおばさんが、図々しく、女の好奇心で明けたのだろう。こっそり返した。庭に公然遠くのではなく、そっと返した。庭で野菜を作った。桑に当たるとは、そんな深いところではない。何をやるかわからないと解釈できる。女性は、真珠が出てくると魔が差すと思う。いずれにしても戻ってきたからホッとする。なんか読みながら平石さんを思い出した。コウキは贋作。新年会続きで、四カ所はしごした。
- 司会 : おばあさんが孫に真珠をあげる。妖気を感じたのはどういうことか。
おばあさまの妖気という経験がない。宝石は代々伝えたい。孫達に私を思い出さずがにしたい。年をとると自分の行動に自信がない。思いがけないところから出てくる。私は節子さんの思い違いで出てくる。
- U : ミステリー風な感じで未解決で、読者が想像をめぐらかしている。面白く興味深く読みました。このコウキのまるはちのところで絵の鳴るような表現。水をたっぷり入れて金魚をいれてみたい。興味深く読んだ。この時代に荒涼とした世の中で、生活苦で想像できないような発想だと思う。芹沢先生らしい発想。恍惚としている、父親の態度。三省さんはやさしい。物欲にこだわらない。
- V : 真珠を読みまして。私は楽しくて面白かった。先程言ったように、節子に託すことが出来ると思った。自分達はこういう時代であるし、火鉢にしたり、金魚を入れたり、ほんとに育ちの良いお嬢さんの発想ではないか。最後の方にアメリカの費用に充てるのも祖母や祖父の形見に対して、あれっと思う。
- W : この作品に関しては、ポジティブな女性だと印象に残った。5日前に女の子が生まれた。
- 司会 : おばさんがなぜ返す気になったか。詔勅の渙発 P17
躑躅は下品だと書かれている。芹沢家ではそういう会話が合ったか。
- X : 聞いたことはありません。躑躅があった。

司会：鈴木さんどうぞ

Y：「勝とうとする心」勝呂先生が発見
池田さんが神奈川近代文学館

司会：民主主義、など座談会のテーマを取り上げている。

司会：テキストで、よくその修練所
P17 上段

Z：おばさんが犯人ではないか。
なくなった真珠を返してくれたのではないか。
昭和21年の夏ぐらいに書かれた。
お父さんが海外旅行に行くのは本心なのだろうか？

A2：父の文学者としての指命。そういう人でも後で返そうとしたのではないか。戻ってくるのはほぼ難しい内容である。

B2：リポルドウリ、フランスのお店。数千金を投じて巴里に行った。高いランクでは使われていうのではないか。

司会：座談会

C2：芹沢先生の話はショックだった。

D2：戦後21年、戦前の話。戦前の話を言っている。

豊田：日本の男性よりも海外の女性の方が優しい。そういうレディファーストの環境でフラっときたのではないか。

池田

E2：昭和21年、戦後の道徳と貞操、そういうのが話題になるほど、芹沢先生はどのようなとふられた。先生の作品に出てくる。これを問題にする事があったのかなあ。本当にあったのではないか。

司会：このテーマ別にして、挺身隊の話が出ている。女子が働いて、男を見る目が出来た。

F2：男は年寄りしかいなかった。婦人雑誌だから、投書が沢山来るのではないか。

司会：私は女学生。

G2：生活が大変だからそういう時間がない。

H2：実情はよく知りません。父が留学したときは、女性の権利はなかったと思う。彼女たちの言うのは、日本の時代と変わらない。進んでいたのは理想の形として現れてくる。今でも女性が低い。自分が慕う事が出来ないけど、そうじゃなくて男性と女性では、男性。ご主人はアジアは飛び回っている。ご主人の帰ってくる時はキャンセルする。おいしいものは粗食が一番。それが希望すること。男性を考えて自分の生活を考えている。ふと思うことがある。私はルールの中で義務付けている。持参金以前の問題がある。フランスでは奥さんの実家では、マダムラフォンの実家は財産権は、これは私の別荘だからとはっきりとしていた。周りの人にも正確に伝えている。

I2：娘がいうにはお母さんの別荘、お父さんのおうちは、とはっきり区別している。

I2：結婚してトリノに住む時マンションを買ってくれた。

J2：座談会のメンバー。そうそうたるメンバー。結論らしいものは出来てこない。戦争の前の日本の家族制度が崩壊する。制度の問題。教養が不足。女学校でも学校が出

たら、教育をする。お花を教える、一つの特徴としては、感性が優れている。これを伸ばす教育をする。ものを見るとはどういうことか。根本的な問題である。男性には男性の教育。終戦直後だから、今いろいろなことをいうのは簡単。日本の家族制度を批判している。女子教育を批判している。

K 2 : 何だかちょっと分からない。私の考え方も変わっている。今の人の考え方もついて行けない。今とは差がありすぎている。若い女の子がオリンピックの男が恋愛関係になる。親切だという。何かが違うのでしょうか。河盛さんが、こういう事をいうのは・・・。国を愛さないのは教育が悪い。

L 2 : 民主主義について。最近はその間好きな本を読んでもらわれる。・・・空振りになる。これはばっちり私の家になっている。自分でアイロンをかけるとなっている。同じ頁で自由主義と民主主義とは食糧などがたくさんあり、苦労していない。個人的にはあまり育っていない。衣食住とかそれなりの努力をしたけど、同じように精神面に対しては、こうしなければならないとはあまり考えないのではないか。川端さんがいうような事は意識的にしなくては民主主義はそだたないのではないだろうか。P 3 3 ものを思うことはどういうことか、その目がしっかりしていないことではないか。目をどれだけ育ててきたか、感性とか正しいものにならない。そういう現状はそうだと思う。本当にやるのは人間にうまく教える、ちゃんと根を張る。勝ち取ったものではない。

M 2 : 池田さんのところ。教養と民主主義では芹沢先生と後の三人とずれている。「人間の運命」を読むと同じように自分のことを自分でするんだよと話している。そういう話が出てきてピンと来ない。同じような話を30頁出てきて、本質的な事は出てこない。ズレている。

N 2 : 座談会でとても面白いと拝見したけど、お花、お茶、何か深くやれば人生観を変えると話されていた。日本の男性が云々。日本の男性が、確かなんです。日本の武士なんです。確かな話。影の力は大きい。民主主義の力は大きい。教養はどのようなかわからない。人生観というのがよくわからない。智慧と教養を持っていた。ライブドア、主人公は変わって無いけど周りの対応のおもしろさ、子供達が変わった場合耐えていく力を育ててあげたい。

O 2 : 日本の良い家庭環境が連綿と続いている。親が見本を示してはいけない。

P 2 : たぶんの家の父は天理教に育っている。母と結婚して、母の家庭とは別々。男性と女性とが目の前に平等に見える。

Q 2 : 作品の感想は魔術師みたいなもの。

R 2 : これだけのことは立派なものだ。今ね、城戸さんがおっしゃっているのはすばらしいと思った。そういう感覚は間違っている。感性に優れているということがある。男や女は持ち分がある。あんまり平等で、ホリエモンでも女性ではないか。

前半のテキストについて何かあれば進めていきたい。

最後の祖母、祖父という象徴しているもの